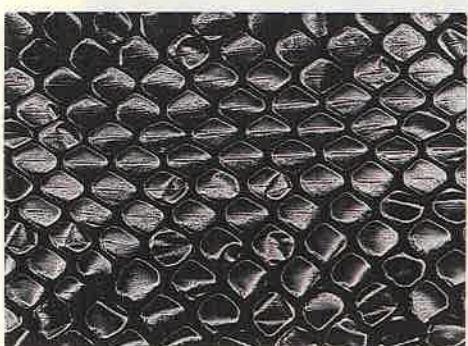
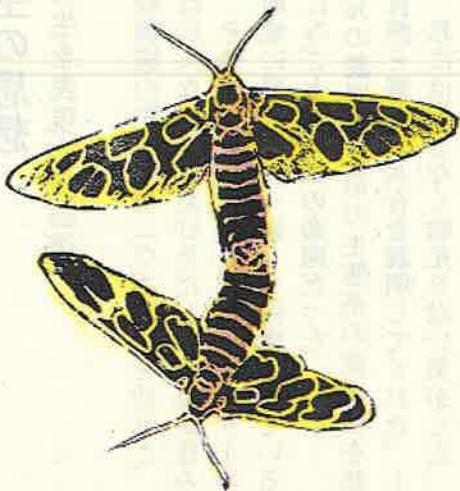


# やまぐち自然派宣言

特集

山口の自然はいま

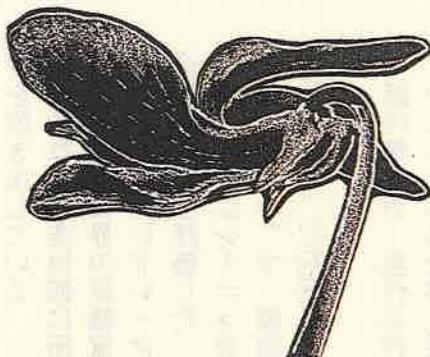
万倉大岩郷  
萩指月山  
カブトガニ  
別府弁天池



## 共生隨筆

共生に関する隨筆を集めました。

井上 佑、佐伯清美、周防大島自然  
体感クラブ、香川郁夫、徳永浩之



やまぐち自然共生ネットワーク

平成 19 年 6 月 9 日

## 共生の思想

共生を表現する芸術



牛浦湿地（ウポ沼）

先般韓国の牛浦湿地（ウポ沼）を訪れた。ここは広大な沼地におびただしい野鳥が住み着き、そのすごさに圧倒された。ラムサール条約湿地に登録され、厳しく保護されているだけにみごとな野鳥の楽園だった。

地元の説明者は沼の生態系の重要性を語り、自然と野鳥の共存を説明してくれた。しかし、私には何となく物足りない気がした。これだけの沼地だけに、農家の人々が沼地をどのように利用し、共存してきたのか知りたかったからだ。きっとこの背後には、地域の歴史、即ち新羅や加耶（任那）の文化、それに基盤を持つ思想が貫かれているはずだ。何としてでもそれが知りたいと思った。



那智滝図 根津美術館蔵

日本では美しい景観地には神々の住む場がある。たとえば、秋吉台では長者が森に祠があり、神の座が置かれている。洞窟でも入り口に注連縄が張られ、神域の結界を示している。ここでは今でも毎年お祭が行われている。水の湧く池にも神が祀られて、毎年盛大なお祭が実施されている。

有名な根津美術館に所蔵されている「那智滝図」は、世界の評論家を驚かせた傑作だ。

フランスのアンドレ・マルローはこの作品を世界の傑作と評価した。絵は単なる写実ではなく、そこにシーニュを見た。シーニュとは

「滝のいのち」で、原始信仰のアニミズムに他ならない。いわば、滝に見られる神だった。

人々は、景観（岬、浜、洞窟、淵、池、滝、岩座、山などの地形）の中にも、核になる場に神を見つけだしている。神聖感の強い場所に神々の座を定め、その場所を汚したり、傷つけることを禁止した。ここでは身を清めて入り、身と魂を洗い、汚れた身や心を浄め、魂の衰えを充たし、自己を蘇らせた。人々はこうして世代を越え、年代を越えて継承し、伝えてきた。多くの自然はこうして人々によって保全され、人々と心を通してつながつて取り上げよう。

話は飛ぶが、現代の作家達も「共生」をテーマにした作品を多く発表している。私は銅版画に興味を持ち、作家達の活動を見続けていた。最近気になる作家がいる。この作家を取り上げよう。

銅版画作家であり、優れたデザイナーの永井正一さんは、共生をテーマにした作品を描き続けている。特に「ライフ」というシリーズは人と自然の共生をテーマにしている。

「今、地球環境についていろいろ云われていますが、日本には八百万の神が山川草木に宿るというアニミズム的な考え方がある。ですから、日本人が、大きさにいえ、これから世界に訴えてゆくには、そういう「共生」だと思うのです。自然とも、動物とも共に生きてゆくことが一番訴えていきたいことですし、またそういう思想を持たなければ、自然環境は救えないと私は思います。」（版画芸術一三五号）

作品は多彩で、奇想天外な自然の構築が試みられている。この作品はポスターなどになり、世界中に広められている。

もう一人の作家は、志村ふくみさんだ。志村さんは人間国宝に指定された染織作家で、優れたエッセイストでもある。

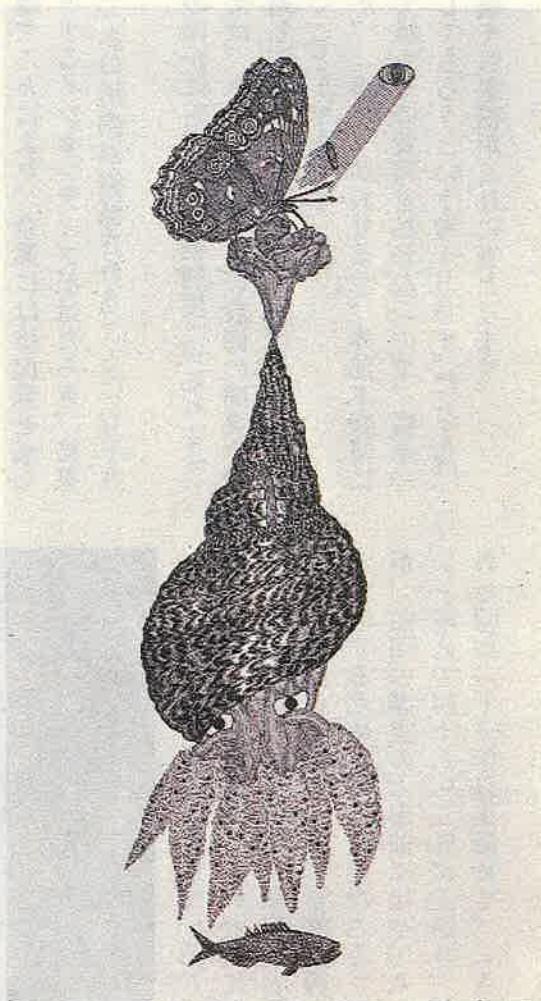
志村さんは植物から染料をいただき、糸を染色し、それを布に織り、着物を作る。いわゆる草木染め作家だ。草や木を切り取り、それを釜に入れ煮出して染料をいただく。草や木が出す色は人の力を越えていて、私たちは植物（自然）から色をいただくのである。志村さんは長い年月をかけて、このことを実体験してゆく。いわば、植物はその魂を色に託していく人に見せてくれるのである。

植物の魂（色）をいただき、糸を染め着物にする。ここでも人の心が込められてゆく。



永井一正  
Kazuyama Nagai  
エッセイ「ライフ」  
2003年  
MPK

《LIFE 3》 エッセイ 35×19.5cm 2003年 61.20



ここでは心をとおして再び植物の色（魂）にふれるのである。自然と人、人と人が密接に心を通わして、ふれ合い、やがて一つになるという状況が生まれる。この実感が共生思想を支える力になる。

志村さんがどうしても得られない色があると云う。正倉院に納められている紫の色だ。昔は日本の自然にムラサキという植物が自生していて、この植物の根から紫色をいただいだ。正倉院のムラサキの布は鮮やかな色を今に伝えている。現在日本ではムラサキは絶滅危惧種で、紫根は得られない。モンゴルから輸入したムラサキの根では正倉院の紫色はどうしても出せないと云う。

## 自然と人との共生を目指して

「自然と人との共生」は人類共通の課題であり、豊かで美しい自然環境を将来の世代に継承していくことは極めて重要です。

十八世紀後半にイギリスで起こった産業革命は、やがて世界中にひろがり、それまでの社会経済の仕組みを全く違つたものに変えてしまいました。人々は市場経済の中で、物質的欲望を満たすために行動し、生産者は自由競争下にあって最大の利潤をあげるよう行動するようになりました。

我が国では、明治、大正、昭和時代と、戦後の復興期、高度経成長期を経て、農業型社会の地方から、工業や商業・サービス業を中心とする付加価値の高い都市へ人々が移動し、「人間中心」、「経済成長優先」の考え方のもとで、人々の生活水準は飛躍的に改善されました。その一方で、公害が発生し自然が破壊され、稀少な動植物が絶滅へと追いやられ、残された里地・里山は徐々に荒廃していました。

果たして、経済成長と自然保護とは両立しうるのでしょうか。

豊かな自然環境が失われるのは、経済学的には、「外部不経済による市場の失敗」とい

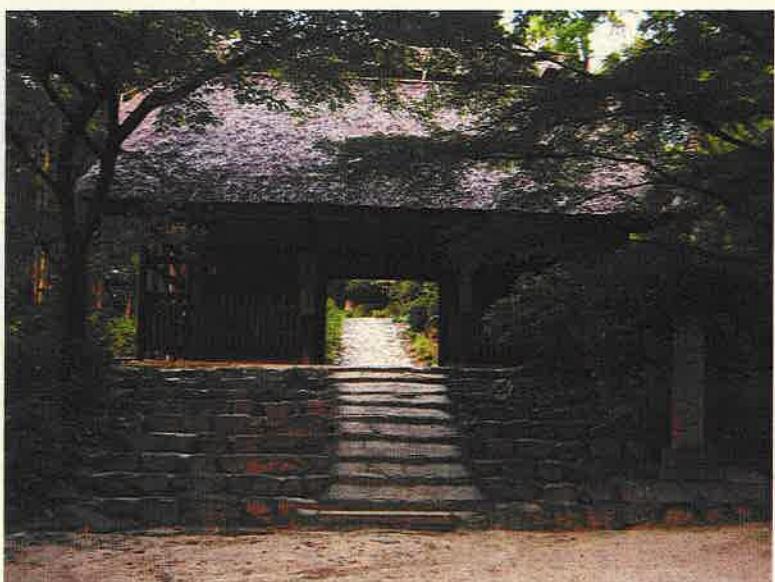
われています。「環境」は、もともと値段のついていない資源で、大気汚染、水質汚濁、地球温暖化など、自然環境破壊の原因者は、誰も自然に負荷を与える費用を負担せず、生活環境の悪化という形で、他の経済主体に転嫁されることになります。

このため、これまでにも自然環境保全のためにいくつかの対策が講じられています。一つの方法は、経済主体（人々や企業など）の行為に「規制」を加えることです。自然公園法や鳥獣保護法、水質汚濁防止法など、自然環境を守るために規制を中心とした方法です。

また、「課徴金」というものがあります。たとえば、水質を汚染する企業に対して課徴金を課すことにより、企業には排出量を減らそうとするインセンティブがはたらき、結果として水の汚濁が軽減されることになります。

このほかにも、「補助金制度」があります。たとえば、水質を汚染しない設備の開発や設置に対し行政が補助することにより、汚濁を防ぐことができます。

また、「課税」があります。外部不経済に対して誰もその費用を払わないのに、税金で負担してもらうという考え方です。たとえば、森林税や炭素税がこれに当たります。



さて、現在、我々が生きている二十一世紀は、正に「環境の時代」といわれています。内閣府が昨年実施した「自然保護と利用に関する世論調査」によると、自然保護を「人間が生活するために最も重要なこと」とした人が、前回の調査の六年前に比べ、八・二ポイント増えて四十八・三%に上がり、調査を始めた昭和六十一年以来始めて、「人間社会と

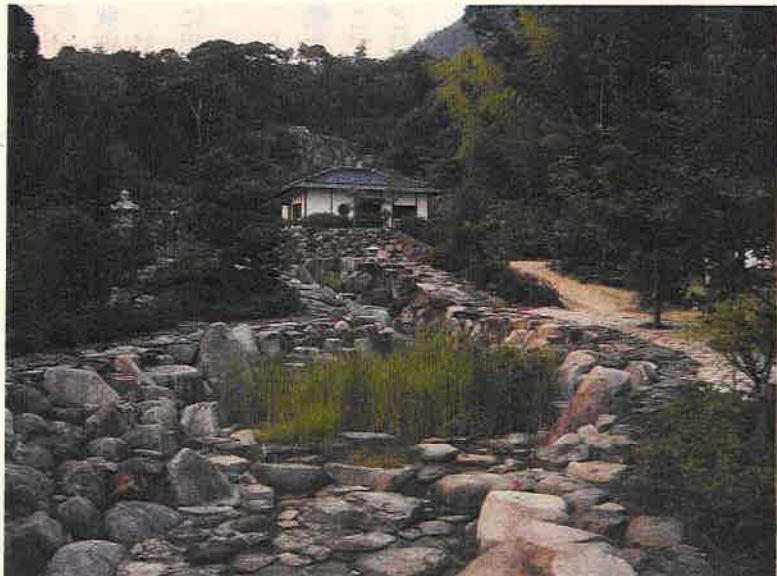
の調和を図りながら進めていくこと」の四十六・七%を上回りました。人々が自然の大切さを再認識したあらわれといえるでしょう。

二十世紀までは、「環境」はビジネスにならないといわれてきました。今や、ハイブリッド車や水・洗剤を使わない洗濯機など、環境に配慮し、自然を守ることがビジネスになり、企業イメージや商品の付加価値を高める時代になつたのです。県では、自然保護や自然の再生のほか、民間を主体とする「やまぐちエコ市場」を設立し、自然界における健全な物質循環を損なうことなく環境への負荷を軽減し、新たなビジネスチャンスの創出による地域経済の活性化にも取り組んでいるところです。

しかしながら、自然環境を守り、次代に伝えていくことは、行政だけでできるものではありません。また、一部のボランティアに頼ればよいというものでもありません。

近年、自然とのふれあいを通じ、住民自らが自然環境を保全・再生しながら、自然と共に生していくこうという機運の高まりの中で、実践的な活動を通じた自然の懸命な利用（ワイヤース）や再生といった取り組みがなされるようになってきました。

県内では、三年前に本県で開催された「全



国野鳥保護のつどい」を契機に、自然保護活動などを実践している団体や県民による「やまぐち自然共生ネットワーク」が設立されるとともに、秋吉台地下水系のラムサール条約湿地登録を契機に、自然環境の保全と懸命な利用を目指すエコツーリズムの取り組みが進むなど、自然と人との共生に向けて、県民が主体となつた具体的な動きが高まつてきています。

今後は、こうした県民が主体となつた取り組みをさらに発展させ、「自然保護」、「自然環境の保全」、「自然再生」などに総合的に取り組み、自然と人との共生を目指した社会を構築することが重要な課題となつています。

このため、自然保護課では、本年四月、これまでの自然公園班を自然共生推進班に再編し、新たに自然共生推進事業に取り組むなど、県民と協働し、眞の意味での人と自然との共生に向けた施策を推進しているところです。この意味からも、やまぐち自然共生ネットワークが中核となつて活躍されることに、大いに期待しています。

山口県環境生活部自然保護課長

中村 正昭

## 平成十八年度の主な事業

### (一) 総会

平成十八年度の総会は五月十四日に秋吉台で開かれた。午前中には、秋吉台パークボランティアの会がモデルエコツアーミーティングを実施した。コースは、長者が森駐車場、長者が森、冠山、地獄台、北山で、インター・ブリッジは

庫本 正と三浦 肇（山口大学名誉教授）、語り部は在津国昭、河野重智、芥川 宝、詩

の朗読は上利邦子会員が行つた。

長者が森では、森の生態系が取り上げられ、狭い森でもすばらしい生態系ができあがつていることが確認された。また、森の上でなく

野鳥をテーマにした詩の朗読から森のいのちを考えた。長者が森から香合に至る歩道では、土壤侵食を受けて荒れた路面の修復をボランティアの会員が行つてることを解説した。裸の歩道は雨水で土壤侵食が起り、常に修復する努力をしなければならない。

冠山から南方に広がる一帯は世界でも屈指のドリーネ密度の高い場所で、みごとなドリーネ景観が見られる。ここで秋吉台の地理を研究してきた三浦 肇先生に地形研究の面白さやドリーネ景観の核心を解説していただき、ここから地獄台に移動して、天然記念物

の碑からみごとなカッレンフェルトを観察した。すさまじい岩の原は強く心に残った。天候もよく晴れていたので、野原を歩くと人が自然と一緒にになるようと思え、大変心地良かつた。ここから草原のなかを歩き、北山にゆき、長者が森の周辺部に広がる平坦面を観察、秋吉台のカルスト地形発達史を考えた。

大変有意義なモデルエコツアーミーティングに思えた。

十一時から秋吉台エコミュージアムで、自然共生ネットワークの理事会が開かれた。ここで、平成十八年度の活動方針案や予算案などが承認された。

十三時から、本会の総会は秋吉台エコミュージアムの野外広場で始まつた。西岡会長の挨拶、来賓挨拶、議長選出に続いて、議事に入つた。平成十七年度の事業報告と収支決算報告が行われた。ここでは、平成十七年十月二十九、三十日に秋吉台で開催された秋吉台国定公園五十周年記念式典及びリレーミーティングが盛大に行われた。記念講演では瀬田信哉先生の「国定公園五十周年を記念して」と題する講演があり、「秋吉台で自然を考えよう」のテーマ、更に各団体の活動報告、秋吉台国定公園を護るために保全計画を見すえ



長者が森駐車場での参加者の集合風景

討論等が行われたことが報告された。

また、五月十四日のきらら浜自然公園で実施されたバードウォッチングと交流会は多数の会員が参加され、活発な意見交換も行われた。

引き続いて平成十八年度の事業計画、予算案が取り上げられ、リレーミーティングは岩国市錦町の羅漢山で開催されることに決まった。更に、秋吉台で進められているエコツーリズム運動と秋に予定されたエコツーリズムシンポジウムを会として支援していくことも決められた。

最後に、本会のホームページの活用について、維持管理をしている会社の職員が出席され、今後どのように充実してゆくべきかが討論された。

## (一) リレーミーティング in

### 錦川流域

第3回のリレーミーティングは平成十八年十月七、八日の二日間にわたり岩国市の西中國山地国定公園及び羅漢山県立公園で開かれた。

新岩国駅に隣接した御庄駅から錦川清流線の電車に乗つて錦川を遡つた。日本一の清流といわれるだけあって、川面はみごとであった。電車は多少揺れたが、昔の電車が連想でき、レトロ気分を楽しませてくれた。

錦町駅で下車、まちぐるみ博物館を見学した。錦町広瀬は林業で栄えた町で、森林で働く人々の豪快な気風が町の隅々に感じ取れる。空き家を利用した「まちじゅう博物館」はこの地方に伝わる民俗資料や歴史資料、新たに開発されたお菓子などがあり、楽しめた。

ここからトコトコトレインに乗つて、岩線の未使用部分を走り、双津峡温泉まで行った。きらら夢トンネルでは、螢光を発す七色の石で描かれた子供達の絵があり、目を見張った。更に進むと、ユビナガコウモリの群があり、興味津々で観察した。

羅漢高原での交流会は、お酒を飲みながら、互いに思いを語り合つた。

十月八日のエコツアーは、二つの班に分かれて行動した。羅漢山登山コースは、紅葉のはじまつた山を登つた。センブリ等の秋の野草に目を見張りながら登つた。

頂上からの眺めは格別だった。山頂には磁石岩があつた。磁気を帶びているので、方位磁針を近づけると、正しい方位を示さないという。記念に解説板を参加者全員で立てた。

これは山口県が県民協働型自然共生手づくり事業として展開されているもので、県民が自然を護る事業を実施する場合、山口県が材料費などを応援する事業であつた。ここでは、磁石岩を保全するためにその重要性を書いた説明板が必要で、山口県の支援によつて立てることができた。説明板の内容は次のとおりである。

もう一方の寂地峡散策コースでは参加者が滝の名称板を立てた。

午後は山口県生活環境部長、岩国市長さんの出席のもとで式典があり、引き続いて山口大学名誉教授山岡郁雄先生の「錦川流域の稀少野生生物について」と題する特別講演会があつた。この地域の川のすばらしさ、野生生物の多様さ、特にオオサンショウウオ等の両生類の面白さが紹介され、心に響いた。

その後、交流会が行われた。司会の白井啓二さんのユーモアたっぷりの司会に引き込まれながら、笑いの中で楽しい意見が出され、有意義だった。

最後に次年度のリレーミーティングの会場になる角島から、伊藤忠雄さんが挨拶され、角島での再会を約束して別れた。

しまうため、「磁石岩」と呼ばれている。このような岩石は山口県では萩市須佐の「高山の磁石石」が有名で、学術的にも貴重であるため、国の天然記念物に指定されている。

やまぐち自然共生ネットワーク

羅漢山の磁石岩

羅漢山付近には、今から二億数千万年前の地殻変動によってつくられた蛇紋岩、泥質片岩、塩基性片岩など、およそ八千万年前に貫入した花崗岩による接触変成作用を受けたかんらん岩が見られる。

このかんらん岩は強い磁力を持つており、方位磁針を近づけると、狂つた方位を指して

## (三) 秋吉台地域 エコツーリズム

山口県では、エコツーリズムで環境思想を広めると同時に、地域を活性化する施策を実施している。

平成十七年度には、県厅内にエコツーリズム研究会が生まれ、広い視野から、エコツーリズムの重要性が議論された。

これを受けて、平成十八年度には、秋吉台をモデル地域にしたエコツアーガ試験的に実施された。秋吉台は観光的には、国定公園指定五十周年を迎えた重要地域であり、またその地下水系はラムサール条約湿地に登録されていて、注目された地域である。

秋吉台エコツーリズムは山口県の観光を牽引してきた秋吉台の観光を再生させ、地域の活力を生み出す策として登場してきた。

エコツーリズムというのは、地域の自然、歴史、文化をテーマに、訪問された方々に資源を保全しながら地区ぐるみで満足できる解説をして、喜びを分かち合おうというものである。

秋吉台では、秋吉台地域エコツーリズム戦略会議が開かれ、理論・実践両面から研究が進められた。実践面では、これまで秋吉台地

域で実践してきた自然解説のグループ（秋吉台エコミュージアムや秋吉台少年自然の家）や秋吉台で自然特に草花や樹木を楽しむグループ（秋吉台の自然に親しむ会）、壊れた自然を修復しているグループ（秋吉台パークボランティアの会）などが独自にモデルエコツアーグを実施し、自然を保全しながら、独自のエコツアーグを追求してきた。エコツアーグは、多様なやり方ができ、他の地方では見られない秋吉台独特の型の開発が求められている。

一方、理論面では、秋吉台を取り巻く広域なツアーグ（地域連携）や地域産業の取り込み、地域の人々総参加での取り組みなどの推進体制などが議論された。

平成十九年三月十四日には、一年間の実践活動を総括する「秋吉台エコツーリズム推進シンポジウム」が秋吉台国際芸術村で開かれた。二井関成山口県知事が主催として挨拶し、霧岡氣は高まつた。また、基調講演は日本交通公社寺崎竜男氏の「具体例から考えるエコツーリズムの勘どころ」で、参加された地域の人々には分かりやすいエコツアーグの紹介に連携して、秋吉台エコツーリズムを推進してゆく段階になつた。三市町は、四月にエコツーリズムの勘どころ」と題するパネルディスカッションが行われ、地域の人々に実戦に向けた心構えを高めた。

平成十九年には、美祢市、秋芳町、美東町が連携して、秋吉台エコツーリズムを推進してゆく段階になつた。三市町は、四月にエコツーリズム推進協議会を立ち上げ、また、モデルエコツアーグも春のツアーグを終了した。今後の展開が期待されている。



秋吉台のドリーネ

## 特集

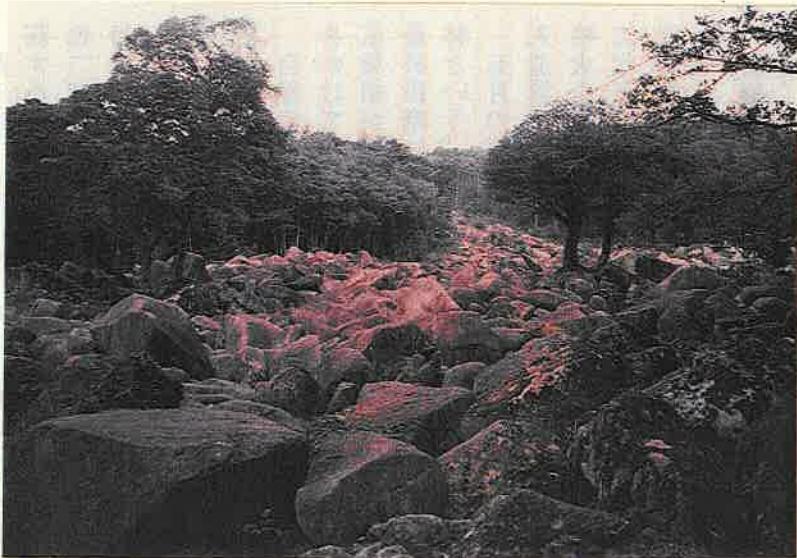
### やまぐちの自然はいま

#### 万倉の大岩郷

美祢市伊佐町奥万倉にある金比羅山の南側の山腹（標高三百二十～三百八十九メートル附近）には、直径一～六メートルの黒っぽい角が取れて丸みのある岩塊が大量に集まり、周りの風景とはまるで異なった樹木のない石の海（岩海）が広がっています。これが万倉の大岩郷です。これと同じような岩海は、宇部市大字西吉部（旧厚狭郡楠木町）にも分布しており、これらは昭和十年（一九三五年）十二月二十四日に国の天然記念物に指定されました。万倉の大岩郷の指定面積は三千九百六十七平方メートル、長さは約百十メートル、幅は三十五四十メートルあります。

この大岩郷に分布している岩石のほとんどは、石英閃緑岩という石で、この付近一帯に広く分布している岩石と同じものです。周囲の道路わきの土手や林の中などにも、丸みのある岩石が土の中から頭をのぞかせているのが観察できます。

では、なぜこのような丸みのある大きな岩



万倉の大岩郷

石ばかりが集まって、大岩郷が出来たのでしよう。実は、昔々、巨人がモツコにつめた大岩を負う子（かつぎ棒）でかついで運んでいたのです。といつてもこんな話を信じる人はいないでしょうが、残念ながらまだこれといった定説はありません。この成因については

1 大地変による山崩れと、その後の風化作用で出来た。

2 閃緑岩の節理（割れ目）に沿って生じたタマネギ状風化によりできた粘土部が流れ去つて、中心部の新鮮な部分が残つた。風化残留巨礫である。

風化の原因が激しい気温変化によるものであり、かつて、植被の乏しい乾燥気候か、今日よりはるかに寒冷な気候であったと推論される。

などのような解釈がこれまでになされています。なお、この形成された時期は、新生代第四期更新世（百六十万年～一萬年前）から弥生後期初頭であろうと推定されています。また、万倉の大岩郷は、岩ばかりが重なつて出来た独特的の地形をしているため、その環境も特異なものがあり、注目すべき植物が多く見られます。ウドカズラ、ウラジロマタタ

ビ、ホウライカズラ、ムギラン、アオガネシダ、サイゴクベニシダ、サジラン、シシランなどの暖地性植物が多く生育しているかと思えば、ミヤマノキシノブ、ハイヒバゴケなど深山性・北方系の植物も生育しています。このような暖地性植物が多く見られる理由としては、岩塊が日中は太陽光を充分に受け温度が上昇することや、冬場は岩塊の隙間が保温的に働くためであると云われています。また、深山性や北方系の植物が生育しているのは、岩海の下には地下水が流れしており、冷涼な環境を作っているためと云われています。

美祢市歴史民俗資料館

高橋 文雄



## 極相の森 「指月山」

萩を旅立つ者は城下町との別れに、また帰萩する者は懐かしさで涙したのが笠屋の「涙松」であるが、その当時も今も変わらず必ず目に映るのが萩城址の指月山である。

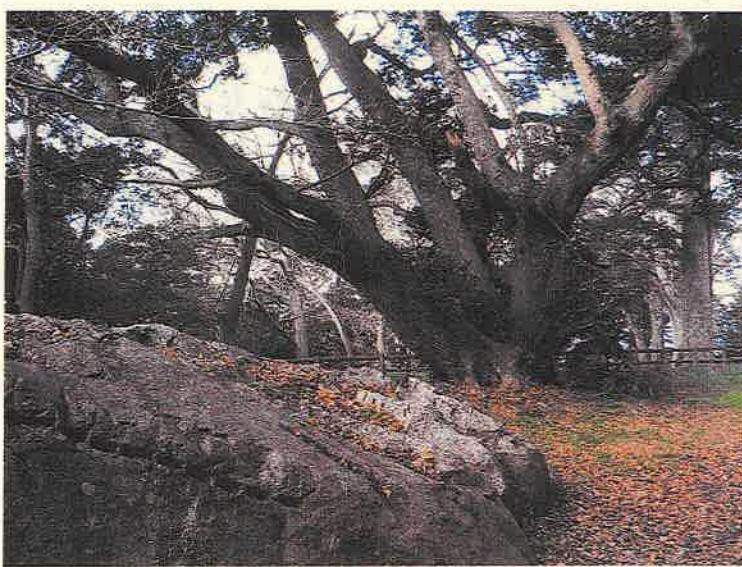
四百年以上も前、毛利輝元が萩に入城以前からその姿を見せてくれている山で、萩市民にとつてはシンボルとなつていて。

自然の植生は常に変移しており、長い年月をかけて草地から落葉広葉に、ついには常緑広葉樹が覆いつくすように、指月山は変移の最終段階にある究極の森である。これを極相林という。

五月の連休ごろに菊ヶ浜から遠望すると、入道雲がモクモクと湧き出るような、火山の噴火を思わせるような樹冠群はみごとで、特に代表的な樹種はスダジイの萌黄色、タブノキの深緑、クスノキの黄緑色が大半を占め、クロガネモチの褐色が点在している。

幹周六メートル以上の巨木が点在する森の中は、まさに自然が作り上げた究極の芸術作品である。

萩市 草野 隆司（樹木医）



指月山の極相林内



指月山

## 山口のカブトガニ

瀬戸内海中国側の自然海岸は、「瀬戸海の環境を護る会」が一九九七年に行つた調査では二一・四%（山口県は二八・六%）であった。かつて、瀬戸内海のほぼ全域に生息していたカブトガニだが、いまでは毎年きちんと繁殖を繰り返しているのは、山口県の三地域だけにまで減少してしまったといつていい状況である。

カブトガニ減少の主な原因は、次の三点であると思える。（一）遠浅の沿岸を埋め立てたため干潟の消滅（幼生の生息地の消滅）、（二）コンクリート護岸による砂場の消滅（産卵場所の消滅）。〔三〕海水の汚染（卵から生態に至るまで影響）。

「生きている化石」カブトガニの生活史にはまだ不明な点もある。産卵は、六月から八月の大潮の満潮時（潮が高いとき）に、海岸にやつてきたつがいが、波打ち際の砂場を掘つて行う（写真）。卵は深さ十五センチほどの砂の中に入り、五十日ほどでふ化する。ふ化した三葉虫型の一齢幼生は、夏の終わり秋口に、潮がくる満潮時に砂から出て、砂泥質の干潟へ移動する。そこで餌をとらず、次の初夏まで休眠し、一齢に脱皮する。この後は、

干潮時に餌をとるため、這い回る時以外は、泥に潜っている。脱皮して成長するが、一回干潟で過ごしたあと、砂質の沖へ移動し、雄は十五歳で、雌は十六歳で成体になると思われる。飼育下では、卵から十五歳の雄成体まで、丸十年を要したが、自然の成長はこれより速い。寿命については、確実な調査は難しく、はつきりしない。

県内の繁殖地について、平生湾には数ヵ所の産卵場と田布施川左右に狭い干潟があるが、かろうじて産卵が続けられている。県土木柳井は、護岸工事に関して、二〇〇一年から続けていた干拓の調査を昨年は中止し、貴重なデータが途切れてしまった。一方、平生町はカブトガニの保護に熱心で、担当者を設け人工産卵場の増成またマスコットなどいろいろなアイデアを生かし続けている。山口湾では、湾内の広い範囲で産卵が行われており、幼生の生息面積も広いが、現在の干潟の変化は、生息に適さなくなる方向である。「椎野川河口域干潟自然再生協議会」が昨年八月、大規模な幼生調査を行つて貴重なデータを得た。下関市の千鳥浜では、瀬戸内海で最も広い七〇〇ヘクタール以上の干潟が出現するが、砂泥質の部分には幼生が生息している。干潟は毎年変化しており、そのうち砂質化し



カブトガニのつがい



た部分には、ほとんど幼生は見られなくなつた。産卵に適した砂場は、広くない。以上のような県内の状況をもとに、山口県は、二〇〇二年に発行した「レシドデータブックやまぐち」でカブトガニを絶滅危惧種とした。私は、一九九二年から調査を始めたが、このままではこの地からカブトガニがいなくなつてしまふと危機感を持ち、一九九七年秋に、「山口カブトガニ研究懇話会」を立ち上げ、調査研究の情報を発信し、また、産卵や幼生の観察会を、毎年下関と山口で続けてきた。毎回子供達や保護者の参加があり、カブトガニの生態を知つてもらつていている。しかし、ここ十年の間に、生息状況がよくなつてきたとの感触はもてない。まだまだ基礎データが充分ではなく、具体的対応もなかなかとれないとままである。これから課題も多い。

成体になるまでに十年近くを要するカブトガニは、絶滅した海域で復活することは大変難しい。

別府弁天池

秋吉台の北部に別府弁天池がある。この湧水池は水量の多い湧泉で、水質もよく、日本名水百選に選ばれた。

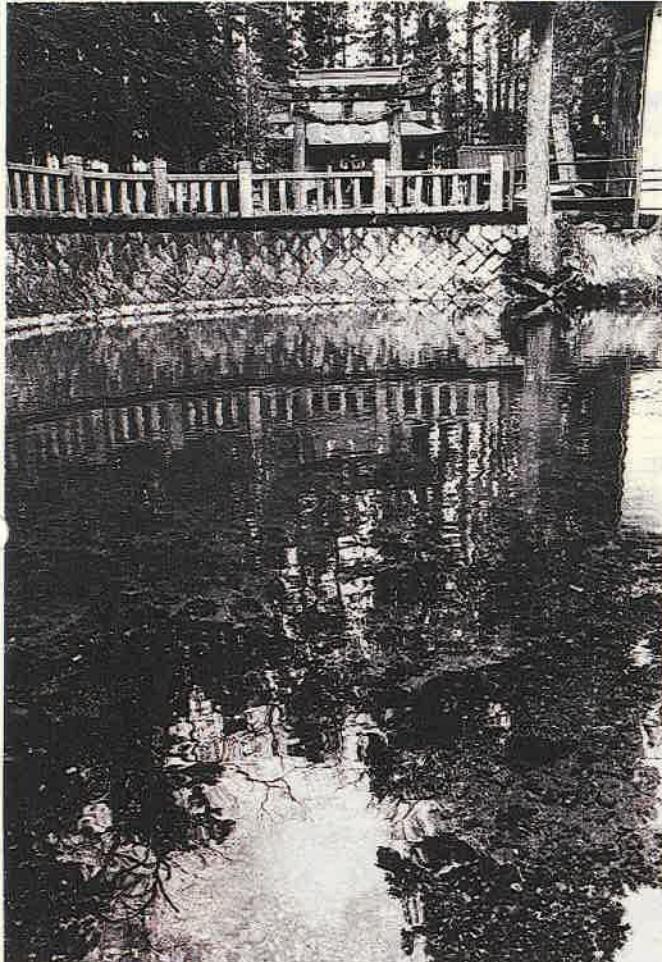
この温泉は花崗岩の間に埋まつてゐるが、秋吉石灰岩の一角に湧いてくる。この湧水はとにかく清らかであり、美しい。

風が吹くと、水面は波立つが、太陽の光を受けると、虹のように輝き、みごとである。最近、底に穴があき、水中洞窟が顔を出した。弁天池の底にある小石は赤い色をしている。これはベニマダラという紅藻が生えてい

るからで、清らかな水の指標でもある。この水にも神が祀られており、毎年大規模な祭りが行われている。山口県無形文化財に指定された別府念仏踊りもこの祭りで披露される。また、水の管理も、昔からの慣行で厳しく決められている。現在でも、地域の人々は池に沈んだゴミを集めたり、水の保全に力を注いでいる。

この名水は山口県でも自慢できる清らかな水なので、将来ともこれを維持するためには上流の森林を保全したり、下流に観光施設を作るなど工夫が必要だろう。

秋芳町  
庫本正



別府弁天池

## 共生隨筆

### 白滝山風力発電について

下関山岳会 井上 佑

自然公園指導員

十一月十七日、白滝山に行つて来ました。

頂上三角点（六六七・三メートル）の南西側、林道から少し登った地点（六一五メートル附近）に風況調査の高いアンテナが建つています。

ここに風車が建てば、白滝山頂上より、風車の羽根の方がズット高くなり、大問題です。林道は天井ヶ岳の北西方向の下関市豊北町と長門市油谷町の境界尾根の豊北町側を工事中で、毎年三月には両町からつながりそうです。工事で出た残土で埋めた土地もあり、風車が建てられそうです。具体的な風力発電の計画は不明ですが、風車は、この林道沿いに建てられるものと想像され、豊北峡からの登山路も林道で寸断されています。

山頂と林道から西を見ると、滝部付近の低山に風車の柱と思われる物が七本建ついて、風車はまだ取り付けていません。滝部付近の風力発電は別にして、白滝山と天井ヶ岳の縦走路の近くを風車の羽が回るの

は景観をそこねる。この地の風力発電は風況調査の結果に拠つて決まるのでしようが。

### 四季との共生

ヒュッテ桂谷ランプの宿

佐伯 清美

春は桜、夏は海、秋は紅葉、冬は雪、そんな季節感は一変した。

七十歳という、一昔なら古い支度、死に支度に迫られるという年齢で、ふるさとの里山に入りした私にとって、春一季でみても、斑雪（はだれ）、春一番、雪解（ゆきげ）、薄氷（うすらい）、鶯、梅、椿、犬ふぐり、蕗のとう（ふきのとう）、下萌（したもえ）など、季節を彩る風物は実に百を越える。

そんな豊穣な里山が荒れている。日本全国では七割、山口県では実に九割という里地（中山間地域）が荒れている。そこに居住する人々の老齢化が進んでいる。奥山林も人工林も荒れている。

私が、私たちが、この山口市郊外の小さな集落で始めた里山再生の仕事は過酷を極める

が、三百五十年前に構築されたという棚田跡の石垣の見事さに見惚れながら、また四季の彩りに染まりながらの労働は楽しいものだ。昭和三十年代の里地、貧しかつたが不幸は感じなかつた里人たちの、子どもたちが好奇心と冒險心に満ちて、里山でひねもし遊び惚けていた時代を取り戻したい。

私たちの朝は早く、夕べは遅い。



ヒュッテ桂谷

## 地域で汗をかくこと

周防大島自然体感クラブ

NPOの活動に携わっている理由は人それそれでしょうけど、多かれ少なかれ地域に対する想いがあるからだと思います。しかしながら、NPO活動が地域に理解されるまでにはもう少し時間がかかりそうです。やつて、本人は犠牲的努力を払つていても、周りからは趣味でやつているようにしか見えない。何かオイシイことがあるのか・・・と穿った見方をされることもあります。何で自分たちがそこまでしなきやならないのか、行政にまかせときやいいじやない。という声もよく聞きます。でもこのままで良いとは誰も思つていません、だつたら今、動かなければならぬはずです。NPOへの理解も足りないのでしきょうけど、NPOの行政や企業への理解も必要でしよう。幸い、NPO活動は行政の人も、企業の人も、大学の人も、団体の人も、誰でも参加できる共通舞台です。まずはここで一緒に汗をかくことがお互いの理解を深め、競争力のある新しいまちづくりにつながる事でしょう。



活動風景

## ほつとけない資源

里山企画 香川 郁夫

家庭燃料として重宝された木炭を再び日常の暮らしの中にも少しでも生かせられればと思い、退職後、炭焼きボランティア等に参加し、「体験を通して山の生態系を知り、山や木に親しもう」と活動を始めました。昭和三十年代後半から家庭燃料に石油やガスが使われるようになり、木炭が忘れ去られました。炭が使われなくなると山も荒れ、竹などがはびこり、山の生態系が崩れていきました。荒れた里山を再生するには、木炭を燃料として生活に根付かせていくのが一番いい。

木炭は再生可能な原料（資源）であり、燃料として利用価値を高めたい。それには火が簡単に起こる「コンロ・木炭」が揃つていることが大切だと思い、いつでも使えるようにしました。また、屋内や卓上で炭火料理を安心して楽しめる道具としてシンプルな構造にしてあります。

炭火は環境にやさしいクリーンなエネルギーで食材にとてもやさしい熱源です。私は環境に配慮したエコ集落づくりと自然と共に生きる豊かな生活を提案してゆきたい。

## センス・オブ・ワンダー

下関市 徳永 浩之

日本を含めた国際社会における環境教育の理念は、ベオグラード憲章やトビシリ宣言を基礎としている。これらは「・・・自己の出来る範囲内で管理し規制する・・・」などと記述され、人間と環境の相互作用よりも人間中心が貫かかれている。

すなわち人間活動と環境の相互作用について、法の理念が他の人や生き物への配慮を非功利的観点で見ようとしなかつたため、市民一人ひとりの自発的取り組みや行動の変革に結びつきにくい結果となつたと考えられる。他方、新しい動きは、自然は人間のために利用するものという価値観を見直し、「人と生きものの共生」「人は自然生態系の一員」ととらえた持続可能な社会の構築を目指すものとなつた。

環境教育が、市民の意識を自発的行動に結びつく知識・態度へと発展させるには、原体験という段階を経て、まず興味や関心を持たせることが重要である。

私たちは自然観察などを通じて、自然や人間そして環境に対する思いやりへと結びつけ

る環境学習、すなわち「センス・オブ・ワンダー」の神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けることのできる自然体験活動の推進を目指さなければならない。

## 「共生」への投稿のお願い

「共生」誌の理想像を探っています。楽しい紙面づくりが大事かと思い、手探りの状態で努力してきました。その結果、何よりも、会員の皆様からの投稿が一番だとうことが分かりました。そのためには早くから計画をたてて、皆様に投稿依頼を続けてきました。早速投稿をしていただいた方々にはお礼申し上げます。

「共生」五号をお届けします。  
自然共生ネットワークの発足から三年が経過、保全の状態や問題点を明らかにすることをねらったものです。この企画は今後も第二弾、三弾と続けていきたいと思います。皆様のご協力をお願いします。

共生随筆は名文も出て、どんどん発展させたいのです。投稿をお待ちしています。

編集係

庫本 正

田中 浩

高実 りか

次号からは編集係が変わり、新たなスタッフで挑戦をつづけます。どうぞ、どしどし投稿を続けていただけますようお願いします。

## 編集後記

